

# 『異邦人』形成の時期と『異邦人』

## —『異邦人』解釈—（その5）の①

平 田 重 和

カミュの頭の中で、『異邦人』の構想が何時頃着想され、何時頃執筆されたのであろうか。

着想については、一般によく知られ、ほぼ定説のようにになっているのが、ロジェ・キーヨの説である。それは1937年説とも言えるものであって、カミュの『手帳』の1937年8月と日付のある次のような記述を根拠としている。

Un homme qui a cherché la vie là où on la met ordinairement (mariage, situation, etc.), qui s'aperçoit d'un coup, en lisant un catalogue de mode, combien il a été étranger à sa vie (la vie telle qu'elle est considérée dans les catalogues de mode).<sup>1)</sup>

まずその構想について見ると、当時ソルボンヌ大学のカステックス教授は、『異邦人』についてのその著書で、1937年の夏に、カミュの治療が行われたアンブラン Embrun（オート＝ザルプ県）の町について触れたあと、「この長引く休息や孤独の生活が、世界に対するカミュの見方を改変させた。そしてカミュ自身の持ち前の野性的な傾向も強められ、さらに瞑想の生活も助長された。ここからカミュのいくつかの重要な作品が生まれることになった」<sup>2)</sup>と述べて、『幸福な死』と同時に『異邦人』の着想がこの年にあることを言い、暗にキーヨの説を支持している。

だが、西永氏が指摘しているように<sup>3)</sup>、ベルナル・パンゴーは、「この仮説は魅力的である」<sup>4)</sup>としながらも1936年の初頭の『手帳』のノートに

見られる「六つの物語」のうちの「Histoire du quartier pauvre. Mort de la mère.」と「Histoire du condamné à mort.」に触れ、「それらは『異邦人』の基本テーマのうちの二つである」<sup>4)</sup>と述べ、「37年着想, 39年執筆」説に反対している。事実, 1937年8月の日付の引用文よりも以前に次のようなメモ書きが『手帳』に見られる。

1937年4月

Récit — l'homme qui ne veut pas se justifier. L'idée qu'on se fait de lui est préférée. Il meurt, seul à garder conscience de sa vérité. — Vanité de cette consolation.<sup>5)</sup>

『手帳 I』の翻訳者である高畠氏は、これを『異邦人』のテーマと考えている。

さらに同年6月の『手帳』の記事に次のようなものも見受けられる。

Condamné à mort qu'un prêtre vient visiter tous les jours. A cause du cou tranché, les genoux qui plient, les lèvres qui voudraient former un nom, la folle poussée vers la terre pour se cacher dans un 《Mon Dieu, mon dieu!》

Et chaque fois, la résistance dans l'homme qui ne veut pas de cette facilité et qui veut mâcher toute sa peur. Il meurt sans une phrase, des larmes plein les yeux.<sup>6)</sup>

『異邦人』と似たようなテーマをもつ『幸福な死』のノートは『手帳』においてももう少し以前に遡ることができる。

しばらくはカミュの頭の中で両小説の構想が共存していたのではない。事実, 1938年の6月にも、『幸福な死』についてのメモ書きが見出される。

*La Mort heureuse:*

Dans le train, Zagreus est assis en face de lui.<sup>7)</sup>

『幸福な死』から孵化するような形で『異邦人』が生まれたことは、両者の質の違いがあるにもかかわらず、恐らく事実だろうと思われるが、それではブルーストの『ジャン・サントゥーイユ』と『失われた時を求めて』に似たような経緯が、『幸福な死』と『異邦人』との間に起こったのだろうか。

パンゴーは、1938年6月の『幸福な死』についてのメモ書き（上述の<sup>7)</sup>の少し前のメモ<sup>8)</sup>に注目して、「カミュの精神の中で、〔小説を書き直す〕という考えに、別の小説を書くという考えがとって変わる時期は、1939年の初頭であるとしなければならないだろう。」<sup>9)</sup>と推測する。なぜなら38年の後半頃から、『幸福な死』に対する暗示は、しだいに稀になるいっぽう、『異邦人』のテーマや逸話のいくつかが現れてくる<sup>10)</sup>からである。そして自ら、「1939年の間にこの計画が構想されたとするR・キーヨの集めた証拠とも一致する<sup>11)</sup>」と付け加えている。

パンゴーは、キーヨの構想と執筆の時期をごっちゃにしているのではないだろうか。キーヨは最初の構想は、1937年の8月のメモ、「普通、人が人生があると思っていたところに、……………」であると考え、執筆は1939年と推定しているからである。

以上を構想ということに関して整理してみると、パンゴーは構想は1937年頃から少しづつであり、かなりハッキリした輪郭をもって構想されたのが1939年、一方キーヨの方は構想は1937年頃からだということになる（微妙なニュアンスの違いがある）。

では執筆の方はどうであろうか。キーヨの方は1939年にかかなり集中的になされたのではないかと推測しているのに対して、パンゴーは自ら分類した「短い仮説」を採用し、1940年1月から5月の間だと推論している。

脱稿は、カミュの『手帳 I』から1940年の5月だということは分かっている。

白井氏の「構想と執筆」の説はどうだろうか。氏は、1937年4月のメモ、「物語—自己を正当化しない一人の男……」を問題にし、1937年3月頃から『異邦人』の構想は練られ、執筆時期は『手帳Ⅰ』に、『異邦人』の決定稿の出だしとほとんど同じ、

Aujourd'hui, maman est morte. Ou peut-être hier, je ne sais pas. J'ai reçu un télégramme de l'asile. 《Mère décédée. Enterrement demain. Sentiments distingués.》 Ça ne veut rien dire. C'est peut-être hier...<sup>12)</sup>

というメモ書きが現れる1938年の秋頃と推定している<sup>13)</sup>。

カミュ自身の書き残したのから推定することはできないだろうか。

Trois ans pour faire un livre, cinq lignes pour le ridiculiser — et les citations fausses.<sup>14)</sup>

これは、『異邦人』が軽く扱われたことを嘆いて、アンドレ・ルッソーに手紙を書こうと考え、カミュが1942年にノートした<sup>15)</sup>ものである。

カミュのいう三年が、1937年から1938年に渡る孵化の時期を含むならば、カミュ自身の言はパンゴーのいう「長い仮説」(『異邦人』が脱稿までに要した時間を三ないし四年とする考え。一方、これに対して40年の初頭から、約五ヶ月間ほどで一気呵成にかきあげたと推測する仮説を「短い仮説」呼んでいる)に相当するわけである。

白井氏は、どう見ているか。「やはり構想をたててから完成まで、ほぼ三年の歳月が経ったのではないだろうか」<sup>16)</sup>と推定している。

『異邦人』の構想が、1937年の4月にはじめて『手帳』にメモされるとしても、カミュの頭の中には、それ以前から、何らかのものはあっただろうし、執筆の時期もパンゴーのいうように「長い仮説」と「短い仮説」が両立しないわけでもないのである<sup>17)</sup>。

いずれもそれなりの根拠はあるだろうが、私はやはり構想から執筆完了までは三年程の歳月を要したのではないかという説を支持し、そして『異邦人』執筆開始の時期については西永氏も考えているように<sup>18)</sup>、先程引用した小説のあの有名な冒頭とそっくりのメモが『手帳』に現れる1938年の12月前後という説をとりたいと思う。

なぜ執筆の時期について、このような考えを採用するのか。パンゴーも同じような主旨のことを述べているが<sup>19)</sup>、「この提案の傍証としては、この時期の前後に『異邦人』に見出される挿話、例えば、レイモンの話、養老院でムルソーの母の〔許嫁〕と呼ばれる男の肖像、養老院の守衛や葬儀屋の話、さらには獄中の主人公のモノログなどが集中的に現れ、さらにこの時期以後になると、それまでこの『手帳』に氾濫していた『幸福な死』のためのノートや何度も練り直される構想が急速に姿を消し始める事実を挙げることができる」<sup>20)</sup> からである。

以上、『異邦人』の構想の起源と執筆時期について若干の考察を試みてきたが、「作品は、書き始められた時、はじめて存在し始める。だからこそ、作品の起源はある意味で、常に虚しい」<sup>21)</sup> ということも言える。

『異邦人』と題されて、この題名がはじめて諸断片にある意味を与えることになったのは、いかなる時期か、厳密に言ってわれわれは知らないことを認め<sup>22)</sup> なければならないのである。

構想と執筆の時期を含む研究は、パンゴーの言うように「源泉批評」という言い方ができるかもしれない。そしてこの方法はある程度の効果はあるだろう。しかし、このような方法にはある限界があることも知らねばならないであろう。

スタンダールの『赤と黒』と『異邦人』の血縁関係を証明しても、真相は、「彼（注：カミュのこと）が、『赤と黒』に魅惑されたのは、処刑のテーマが彼にとりついていたからなのである」<sup>23)</sup> かも知れないのだから。

パンゴーが述べているように、「テキスト外《hors-texte》と呼ぶことができるようなものに対する関係は、決して単なる流出 *émanation* の関係ではなく、それはむしろ〈指示〉 *référence* の関係である」<sup>24)</sup> とするなら

ば、「物語の唯一真の源泉は、語ろうとする決意である。」<sup>25)</sup> と言わねばならないだろう。だから作品の〔源泉〕の研究にはある種の限界があることになる。

最近の新しい研究方法（例えばニュー・クリティックなど）を踏まえて言えば、「作品のすべては言語のレベルで生起する」<sup>26)</sup> と言えるので、従って、上述の例文のように、「作品は書きはじめられたとき、はじめて存在し始める」というような言い方がなされるのである。

「源泉批評」はかならずしも有効な方法ではないということを認めつつも、以上『異邦人』の構想された時期と、執筆されたであろう時期について見てきた。そしてある程度の推測は可能になったと思う。

次にカミュが『異邦人』を完成する時期のカミュの精神状態、すなわちカミュをして「語ろうとする決意」を促すに至らしめた内面（生活）について考えてみたいと思う。

この問題は「源泉」の問題よりも一層微妙で厄介である。

「物語—自己を正当化しない一人の男……」の句が見える1937年から、『異邦人』脱稿の40年までの間にカミュが「決意」をしたと考え、その期間を年代的にちょっと振り返って見よう。

1937年は初頭に、共産党の下部組織である「文化会館」がオープンされ、そのまた下部組織とも言える「労働座」で、カミュは精力的に演劇活動を行っている。（ベン・ジョンソンの『エピソード、あるいは沈黙の女』、アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』、プーシキンの『ドン・ファン』など）

5月 『裏と表』刊行（シャルロ書店）

7月 アルプス山中のアンブランにて転地療法

8月 はじめてパリへ行く。その後アルル、サヴォア地方などをまわる

9月 ジャンヌ・シカール、マルグリット・ドブランと連れ立って二回目のイタリア旅行。

その後共産党との間がうまくゆかず（アルジェリアの民族運動に対する

党の態度がカミュの意に沿わなかったので、脱党する) 必然的に「文化会館」からも離れることになる。しかし、「労働座」を解体したものの、あらたに「仲間座」を設立し、演劇活動は続ける。

37年にはもう一つの断絶を経験している。それはシディ=ベル=アベスのコレージュの教授職を断念せざるを得なかったことである。

1938年以後のことは、パンゴーを参考にまとめてみよう。<sup>27</sup> 1938年9月、自由主義的なヨーロッパ人のグループが、パスカル・ピアの率いる日刊新聞『アルジェ・レピュブリカン』紙をアルジェで創刊することに決める。カミュはようやく自分に合った仕事をここに見出す。彼は文芸通信を書きはじめる。しかし、彼の活動は、やがて他の領域、特に政治の領域に広がる。スペイン〔の内乱〕に関するいくつかのテキストや、「ミュンヘン会談」に関する一文を除けば、彼の記事は、要するに、少数のヨーロッパ人によってアラブ人民に定められた運命の不当さを告発することに向けられている。例えば、それは1939年6月5日～15日、「カピリア地方の悲惨」と題されて発表され、反響を呼んだルポルタージュであり、カミュが熱心に被告の味方をするさまざまな裁判事件である。その被告というのは、誤って詐欺罪にとわれた技術員オーダン、導師ミュフティの殺害を準備したとって植民地主義者たちが告発する説教師エル・オクビー、一審で有罪となり裁判が破毀院に持ち込まれたオーリボーの〔放火犯たち〕、7月14日のデモによって起訴されたP・P・A（アルジェリア人民党）の指導者達である。

それと平行して、カミュは『カリギュラ』を書き、ニーチェの読書を続け、キルケゴールの『絶望論』(*Traité du désespoir* par Knud Ferlov et Jean Gateau『死いたる病』)を発見する。1939年、彼は数名の友人と共に、地中海文化のための雑誌『リヴァージュ』誌を創刊し、『結婚』を発表するが、だからといって演劇活動をおろそかにしない。「仲間座」は、彼の指導のもとに年に二つないし三つの出し物を上演する。その中には、アイスキュロスやジードやシング(1871～1909、アイルランドの劇作家)の戯曲、コポーによる『カラマゾフの兄弟』の翻案が入っている。

戦争がはじまる。カミュは軍隊に入ろうとするが、軍は彼をとらない。「好ましからざる民間人」の彼は、『アルジュ・レピュブリカン』誌の姉妹新聞で、そのあとをついだ『ソワール・レピュブリカン』誌の主筆となる。彼はたちまち検閲と激しく争い、1940年1月10日、それが新聞の廃刊をもたらす。二ヶ月後、パスカル・ピアに呼ばれて、彼はアルジェリアを離れ、編集部員として『パリ・ソワール』誌に入る。1940年5月、『異邦人』を書き終えるのは、パリのモンマルトルの小さなホテルにおいてでる。

さてこうして見てくると、カミュに孤独と断絶感（異邦性）とを味わわせる原因になったものはいくつか考えられる。病気の悪化、貧しさ、新聞記者としての敗北、共産党からの脱党、旅の孤独等々。

ところでこの中で最大のものは病気の悪化ではないかと思われる。

年譜を追って見ると、パンゴーのいうように、1937年から40年にかけて、カミュの関心事は演劇活動のような団体行動であり、冤罪事件の被告の弁護活動であり、カピリー地方の最下層の人々の擁護であるといった具合にいわゆる社会活動家のような行動が目立つ。そして、「1938年～40年にカミュが最真にしている文学は、事実、今日なら〔参加〕のと呼ばれるような文学」<sup>28)</sup>である。だから『異邦人』がどれほどそれを反映していないかがわかって驚くほかないし、「最後の逆上を別にすると、ムルソーの行動のうちには、自分が生きている社会に関する何らかの意見を示すものは何に一つない」<sup>29)</sup>のである。

だから『異邦人』はカミュの非常に内的なところから生まれた作品といえることができるであろう。ある意味でそれだけに一層、この当時のカミュの内面を表しているとさえ言えるのである。この当時の実生活者としてのカミュが新聞記者をしたり、「参加」の文学を呼びかけたりしているのは（1939年9月にはじまった戦争の影響があるだろう）内面の不毛性を覆い隠すという心理が働いていたと見る事もできるだろう。

空虚な内面を忘れるため、あるいは充たすため、人は活動するのである。実生活者としてのカミュと不条理期の時代の作品のギャップはやがて将来距離がちぢめられるが、この当時のカミュを外的な面からだけで捉えてし



まうと、作品の解釈をゆがめてしまう恐れがあるのである。

初期作品群の中に特徴的なものとして、死の影が出ているということは、改めて確認することでもないが、やはりこの問題を抜きにしては『異邦人』は考えられない。

それには、17歳の時に発病した結核のことを言わなければならぬであろう。健康でスポーツ好きの17歳の青年が、突然結核を宣告されるということは（今でいうと癌を宣告されたようなもの）まさに晴天の霹靂でどれほどショッキングなことか想像するに難くない。従って、ある意味では『異邦人』の源泉はここまで遡らねばならないであろう。

しかし、今見ようとしているのは病気の宣告ではなく再発である。不治の病であるという認識。これもまた人を滅入らせるに十分な重みがある。

勿論、これがすべてを説明するわけではないが、長引く病気と、その病気の悪化という状態がカミュの内面に深く影響を及ぼしたのであることは容易に想像される。

この病気から直接的に引き出されるものは死である。

『シーシュポスの神話』の執筆開始時期、これまた不明だが、脱稿の時期は分かっている。（1940年9月第一部完成。1941年2月脱稿）。

『異邦人』の姉妹編『シーシュポスの神話』の冒頭の句、

Il n'y a qu'un problème philosophique vraiment sérieux: c'est le suicide. Juger que la vie vaut ou ne vaut pas la peine d'être vécue, c'est répondre à la question fondamentale de la philosophie.<sup>30)</sup>

は当時のカミュの内的な問題に関する関心の在りかを明瞭に示しているものと言えよう。

『神話』はソディが述べているように<sup>31)</sup>、「計画し、希望し、野心を抱いて自分の人生を操れると信じ」ていたものが、「人間は死すべきもの」という真理につき当たって、孤独と同時に、意識の目覚めを自覚した後、世界の差し出す富を多面的に、かつ長時間享受することの善を説く。

ムルソーは「失われた時を求めて」への回帰的な軌跡を描き死を克服すると言えるが、伝統的な言い方をすれば、カミュ自身も『異邦人』と『神話』（勿論『裏と表』や『結婚』も含まれるが）を書くことで精神の危機を乗り越えたと言えるのではないか。

『裏と表』と『結婚』について言えば、これらのテーマは「生と死」であると言って過言ではないだろう。生と死の問題と格闘しているカミュの姿が、作品の行間から垣間見られる。両者の間で揺れるカミュの関心から、一つの作品が生まれた。それが『異邦人』である。

「おそらく病気によって現実化されたカミュの真の妄執、真のモチーフ、それがまさに〔断頭台〕であると私は思う。」<sup>32)</sup> とパンゴーも述べている。

カミュの伝記から、彼がギロチンに関する考察ないし感想を書き留めたものを拾ってゆけば、おそらくかなりの数にのぼるであろう。

1936年初頭にはすでに、『幸福な死』のテーマに関連して次のようなメモがある。

Patrice raconte son histoire de condamné à mort.<sup>33)</sup>

少しあとの部分で、「六つの物語」としてされた中でも、Histoire du condamné à mort.<sup>34)</sup> という記述が見受けられる。先きでも引用した、Condamné à mort qu'un prêtre vient tous les jours.<sup>35)</sup> は『異邦人』のテーマに結びつくところだが、もちろん死刑囚の物語である。

1938年12月の『手帳 I』のメモには次のようなものがある。

Il n'y a qu'un cas où le désespoir soit pur. C'est celui du condamné à mort (.....). On pourrait demander à un désespéré d'amour s'il veut être guillotiné le lendemain, et il refuserait. A cause de l'horreur du supplice? Oui. Mais l'horreur naît ici de la certitude. — plutôt de l'élément mathématique qui compose cette

certitude. L'Absurde est ici parfaitement clair. C'est le contraire d'un irrationnel. Il a tous les signes de l'évidence.....L'évident c'est qu'on va lui couper le cou et pendant qu'il est lucide — pendant même que toute sa lucidité se concentre sur ce fait qu'on va lui couper le cou.<sup>36)</sup>

このメモ書きは殆ど逐語的に『シーシュポスの神話』に再録されている<sup>37)</sup>。

『結婚』のエピグラフはスタンダールからの次のような文であることは周知のところである。

Le bourreau étrangla le Cardinal Carrafa avec un cordon de soie qui se romprit: il fallut y revenir deux fois. Le Cardinal regarda le bourreau sans daigner prononcer un mot.<sup>38)</sup>

ムルソーが母から聞いた話として、死刑執行を見物した後、帰宅して気分を悪くした父の話は、実際カミュが現実の母から聞いた父の体験談であろうが、1957年に書いた『ギロチンに関する考察』は次のように始められている。

Peu avant la guerre de 1914, un assassin dont le crime était particulièrement révoltant (il avait massacré une famille de fermiers avec leurs enfants) fut condamné à mort en Alger.<sup>39)</sup>

母から聞いた父の話として、死刑執行の現場を見たことがなかった父が、ある日死刑の現場を見て、家に帰ってくるなり、気分が悪くなり嘔吐した話を書いた後、

Il faut croire que cet acte rituel est bien horrible pour arriver à

vaincre l'indignation d'un homme simple et droit et pour qu'un châtement qu'il estimait cent fois mérité n'ait eu finalement d'autre effet que de lui retourner le cœur.<sup>40)</sup>

『ギロンチンに関する考察』が1957年に書かれたことを見ても、カミュが終生、死刑執行に関心をもっていたことが証明されると思うが、ソディは『ギロンチンに関する考察』の丁度10年前のことについて次のように述べている。

「1947年、抵抗運動でルネ・レイノーと会った時のことを語りながら、カミュは、[あの時も現在同様私は想像力を欠いていた]と述べた。そしてムルソーもまた、彼が自分自身の死について考えを及ぼすとき、全く同様であるといえるだろう。」<sup>41)</sup>

死刑執行=死、つまり人間の条件について、人はふだん忘れているが、カミュは病気のために常に身近にこの問題を抱えていたと思われる。

.....que rien n'était plus important qu'une exécution capitale et que, en somme, c'était la seule chose vraiment intéressante pour un homme ! とムルソーは述懐する<sup>42)</sup>。

処刑前のムルソーは「死」の乗り越の一つの型を示していると言えないか。

(次年度へ継続)

※ 本研究は、平成11年度関西大学学術研究助成基金（共同研究）によって行なった。

(本学教授)

## 注

- 1) Carnets I (Gallimard) p. 61 (キーヨは執筆の時期は1939年だと考えているようだ。)

- 2) P.G.Castex: Albert Camus et *L'Etranger* (José Corti) p. 14
- 3) 西永良成著『評伝アルベール・カミュ』(白水社) p. 70
- 4) Bernard Pingaud: *l'étranger* de Camus (Classiques Hachette) p. 4
- 5) Carnets I (Gallimard) p. 46
- 6) Ibid. p. 49-50
- 7) Ibid. p. 116
- 8) Ibid. p. 112  
 Juin. Pour l'été:
  - ① Finir Florence et Alger.
  - ② Caligura.
  - ③ Impromptu d'été.
  - ④ Essai sur théâtre.
  - ⑤ Récrire Roman
  - ⑥ L'Absurde
- 9) Bernard Pingaud: *l'étranger* de Camus (Classiques Hachette) p. 35
- 10) Ibid. p. 34
- 11) Ibid. p. 35
- 12) Carnets I (Gallimard) p. 129  
 決定稿との違いは、《Mère décédée……の前に〔:〕記号があるかないかの違いと、C'est peut-être hier... の est が決定稿では était と半過去になっていることである。
- 13) 白井浩司著『アルベール・カミュ その光りと影』(講談社) p. 131
- 14) Carnets I (Gallimard) p. 32
- 15) Bernard Pingaud: *l'étranger* de Camus (Classiques Hachette) p. 33
- 16) 白井浩司著『アルベール・カミュ その光りと影』(講談社) p. 131
- 17) Bernard Pingaud: *l'étranger* de Camus (Classiques Hachette) p. 34参照
- 18) 西永良成著『評伝アルベール・カミュ』(白水社) p. 70
- 19) Bernard Pingaud: *l'étranger* de Camus (Classiques Hachette) p. 34-35参照
- 20) 西永良成著『評伝アルベール・カミュ』(白水社) p. 70
- 21) Bernard Pingaud: *l'étranger* de Camus (Classiques Hachette) p.35
- 22) Ibid. p. 6

- 23) Ibid. p. 28-29
- 24) Ibid. p. 9
- 25) Ibid. p. 9
- 26) Ibid. p. 10
- 27) Ibid. p. 7-8
- 28) Ibid. p. 13
- 29) Ibid. p. 12
- 30) *Le Mythe de Sisyphe* (Gallimard) p. 15
- 31) Philip Thody: *Albert Camus, 1913-60* (Hamish Hamilton) p. 22
- 32) Bernard Pingaud: *l'étranger de Camus* (Classiques Hachette) p. 22
- 33) *Carnets I* (Gallimard) p. 24
- 34) Ibid. p. 26
- 35) Ibid. p. 49
- 36) Ibid. p. 141
- 37) *Le Mythe de Sisyphe* (Gallimard) p. 30
- 38) *Noces* (Gallimard) 見開きのページ
- 39) *PL II Essais* p. 1021
- 40) Ibid. p. 1021
- 41) Philip Thody: *Albert Camus, 1913-60* (Hamish Hamilton) p. 36  
ルネ・レイノーについては、—フランスの詩人。抵抗運動に従事したかどで、  
1944年に銃殺される。ガリマール社から出版された『遺稿集』にカミュは序  
文を書いている。
- 42) *L'Etranger* (Gallimard) p. 155